

「ことわり」について

一号21の「歌のり」という語句が、十二号44で「筆につけたことわり」と言い換えられていることは先述した。『岩波古語辞典』によれば、「ことわり」という名詞は動詞としても使われて、①話の筋道をつける、②道理ありとする、③判断を下す、④前もって事の次第を知らせる(予告する)、⑤拒絶する、を意味する。こうした意味をもつ「ことわり」は、「おふでさき」ではどのように用いられているのであろうか。まず、それが最も多く使用されている第十二号の歌群からみていきたい。先行研究による意味の区割りを参考にして、便宜上A群、B群、C群に分割する。

A群(十二号9~13)

- これからハせかいぢうを一れつに
月日そふちをするでしよちせ (十二8)
これまでもせへいゝばいにことわりを
月日だんへゆうであれども (十二9)
くちさきでゆうたるまではたれにても
たしかしよちをするものハない (十二10)
いまゝでも月日の心だんへと
せへいゝばいにつくしいれども (十二11)
せかいにハたれかしりたるものハなし
とふむこのたび月日せひない (十二12)
それゆへにせかいぢうをとこまでも
ことわりてをく月日しりぞく (十二13)

ここでは、9で「ことわり」は「ゆう」という言語行為に結び付けられて、9と11の「だんへ」と「せへいゝばい」から、その言語行為が精いっぱい尽くされた「月日の心」に基づいていることが示されている。そして、その内容は8と9の関連では「月日が掃除をする」、13では「月日が退く」とされているが、いずれにしても「予告」を意味するような文脈で使われている。

B群(十二号24~30)

- 月日にハなにかよろつをだんへと
ことわりであるこれがしよちか (十二24)
いまゝでもなにか月日のさんねんを
たいていくどきつめてあれども (十二25)
せかいにハたれかしりたるものハなし
月日の心ざんねんをみよ (十二26)
このたびハことわりたゆへまだくどき
そのゆへなるのことわりである (十二27)
いかほどにくどきことわりゆうたとて
たれかきゝわけするものハない (十二28)
それゆへにだんへひがらたつけれと
いつかこれやとわかるめハなし (十二29)
けふの日ハもふせへつゝがきたるから
月日でかけるみなしよちせよ (十二30)

ここでも、28で「ことわり」は「くどき」と並列的に「ゆう」という言語行為に結び付けられて、それに対して人間側の「聞き分ける」(28) ことのなさが「月日のざんねん」として記されている。とりわけ、27では「ことわり」の上に「くどき」、さらにその上に「ことわり」を述べているのだと、人間に重々知らせていることを表現している。そして、その結果として「月日でかける」ことを「承知せよ」と勧告している。

C群(十二号31~38)

- このさきのみちのすがらをゆてきかす
いかな事をばゆうやしろまい (十二31)
にちへになにをゆうてもそのまゝに
みゑてくるのがこれわふしぎや (十二32)
とのよふな事をゆうやらしれんでな
そこでなんでもことわりばかり (十二33)
ことわりも一寸の事でハないほどに
いかな事をがみゑてくるやら (十二34)
どのよふな事がみゑるやしれんでな
まこときのどくをもていれども (十二35)
なんときにみゑる事やらこれしれん
月日の心つみきりてある (十二36)
こらほどに月日の心しんばいを
そばなるものハなにもしらずに (十二37)
そばなるハしことばかりをふもている
みへたるならばもんくかハるぞ (十二38)

B群の続きだが、ここでは、前半で「親神の言った通りのことになってくる」が「ことわり」を述べているとされて、34でその「ことわり」の内容が「見えてくる」ことが記されている。そして、35でそれは親神にとっては「気の毒」ではあるが、36・37でそうしたことを現してでも人間(とりわけ「傍の者」)に聞き分けを求める「月日の心配」が詠われている。また、十二号の後半では、これまでに「ことわり」を言っても「しんかわからん」(十二131)とも述べられている。

このように、「ことわり」は、「おふでさき」では、道理を知らすという基本的な意味とともに、前もって事の次第を知らせる(予告)という意味で使われることが多い。六号94、九号37・38、十一号23・24、十四号40、十六号43、十七号31なども「予告」として使われており、複数の歌で「せへいゝばいに」という副詞が付されて、親神がどんなことを人間に見せるのも、予め親神が心を尽くして知らせた上で現しているのだと詠われている。なかには、「もうこれからは、ことわりはない」(十三8)とまで述べて、人間の聞き分けを渴望されている。ただし、「にちへによりくる人にことわりを／ゆへばだんへなをもまあすで」(二37)では、予告より、道理を知らせることの意味が強いと思われる。

改めて言うまでもないが、予告は教導のためになされる。十二号44では「いまゝでにふでにつけたことわりが／さあみゑてきた心いさむで」と、予告しておいたことが現れても決して心が落ち込むことなく、「さあ」という呼びかけの感動詞とともに、「心いさむ」ことが示されている。十三号の冒頭(1~4)にも、そうした「ことわり」として予め注意を与えておいて、明るい将来へ導いていく主旨が詠われている。

- 一けふまでわなにかしんばいたなれど
あすにちからわをふくハんのみ (十三1)
いまゝでハどんななんぢうなみちすちも
みへてあるからことわりばかり (十三2)
このさきハたしかうけやう月日にハ
どんな事でもあふなきハない (十三3)
たんへとどんなハなしをきいたとて
せかいたのしめ月日はたらき (十三4)